

海外いけ花修業

Overseas Ikebana Training

西垣 和子
NISHIGAKI Kazuko

Abstract: I have been in Brazil for *Ikebana* training four times. This is the report how I was trained myself as well as training Brazilians at Rio de Janeiro, Sao Paulo, and Brasilia in how to practice *Ikebana* or Flower Arrangement. The name of my school is “Sangetsu Kohrinka”(Mountain-Moon, Light-Ring Flowers). The object of this school is, by the founder, Mokichi OKADA, the founder of MOA Museum at Atami, was to build up the Paradise on Earth through beauty. *Ikebana* is one of the practical and easiest ways to foster beauty and kindness in mind, at home, and in society, which lead to create the paradise on earth. One of his teachings was “Be international,” or “Be world citizens.” I was most impressed by the earnestness of the seminar or workshop participants, and was confident that they would be the leaders of the school in this country. Also, I was moved anew not only by the beauty but by the livingness of flowers and the power of nature, or the great Nature.

Keywords: *Ikebana*, flower arrangement, Sangetsu Kohrinka, Paradise on Earth. いけ花、山月光輪花、地上天国

私は今日迄四度ブラジルに行かせていただきました。ブラジルは去年リオデジャネイロで、夏季オリンピックが開催されましたので、遠くて近い国となり、更に親近感を覚えていらっしゃる方が多いのではないのでしょうか。ブラジルではリオとサンパウロ、ブラジリアの三都市に参りました。

ご存知の通りブラジルは南半球に位置し、日本とは表裏の関係にあつて、時差は 12 時間、気候も正反対で熱帯から亜熱帯に属し、私が参りました時のサンパウロは冬と言っても朝は日本の早春、昼は初夏、夜は晩秋から初冬と、一日の中で春夏秋冬を経験出来るような気候でした。従って街行く人の服装もまちまち、朝から半袖の人、長袖の人、コートを着た人、毛皮の人といったように天候に束縛されない自由なスタイルで、陽気なお国柄という印象を受けました。

広大な土地を有し、南米の五分の二以上を占めて、日本の 23 倍もあるという大国。

親日感情は極めて良好で、日本からの移民も百四十万人以上とか、サンパウロは日系人

が七十万人とも言われていました。

最初に参りましたのは今から四十年前でした。当時私はブラジルに対しこれといった知識もなく、コーヒーの生産地である事と、巨大なアマゾン川くらいしか思い浮かばず、現在のようにサッカーの強い国とか、リオのカーニバルの賑わいとか無知で、想像もつかない遠い遠い国でございました。

一九七六年（昭和 51 年）十月、ブラジルへ三週間の予定でお花の指導に出向するようにとの指示が本庁よりありました。当時のブラジルの華道は、池坊はじめ草月流、小原流、古流等が活動していたようでした。私は「山月光輪花」という組織に所属しておりまして、現地での指導会は今回が初めての試みでございました。

実は現地の方が、この山月光輪花の主旨に関心をもち、ブラジルでも是非山月を広めたいとの強い意向と要請があり、本庁で検討の結果、開催の運びとなりました。そこでこの中から指導者階級の人材を選出し、ブラジルでの普及活動に推進してもらおうという事で、華道庁の次長と私達三名の教授が派遣された訳でございます。言葉の通じない未知の国への出向は興奮と不安が交錯いたしました。

「山月光輪花」開祖は「花による天国化運動」を提唱され「我等の狙いは如何なる階級、如何なる場所と雖も花あり、誰の眼にも触れるようにすることである」と、又「人間の居る処必ず花ありという様な社会になれば、現在の地獄の様相を相当緩和する力となろう・・・」と申され、更には「世界人たれ」とも仰られ「これからの人間は世界人にならなければ駄目だ。全人類を融和させ世界を一家の如くにする平和主義であらねばならない・・・」と。

又、和歌を通して

顔^{かお}形^{かたち}色^{かわ}は変れどおしなべて
神^みの御^め目^めには同じ^{くに}国^{びと}人

とお詠みになられました。これらの事々が私の脳裏に去来し、この教えにあと押しされ、そうだ同志を育成し、共に開祖の心の実現に寄与し、互いに学ぶことが大切と、急に勇気と元気が出て参りました。

お家元からは「山月光輪花が地球の裏側に渡るという事はブラジルを拠点に開祖の花の心を世界に向かって発進する大きな使命があるとの心持ちで出発してほしい。」と暖かいお言葉がございました。

華道庁長からは、「言葉の点は心配なくていい「イエス」「ノー」をはっきりさせる事

が大切」とのご指導をいただきました。この様に身に余る激励と期待のもとに勇躍現地に臨む心得が出来ました。

加えて、この際南米はブラジルだけでなく、アルゼンチン、ペルー、北米はアメリカのロスアンゼルスからも是非来て頂きたい、開催して欲しいとの要望があり、結局四十日間、花の使者、取次者として各国へ赴くことになりました。

四ヶ国を廻り、多くの人との出会いがあり交流が生まれ、日本では得られない貴重な体験を掴ませていただきました。私の花人生の基礎はこの時培われ形成されたと言っても過言ではなく、只々勿体ない思いで感謝しております。本当に私は海外で育てていただきました。

次いで第二回目は、第一回目より二年後の一九七八年（昭和 53 年）七月十九日から八月四日迄、十七日間でした。

前回同様「教授職養成と審査」と言う事で華務部長と教授二名で出かけました。

初めての時も大変緊張致しましたが、二度目も又別な意味でのプレッシャーがございました。二度目と言う事で、初心を忘れ慣れて易きに流れてはいけない、二年前の私ではいけない、多少なりとも心技の進歩向上が見られ、開祖の心や光輪花をより具体的に取り次がねばいけないとの責任が湧いて参りました。

お陰様で主催者側の寛容と受講生の歓迎と期待の中で、案ずるより生むが易しで、無事、盛会裡に講習会を終了することが出来ました。

その後の二回は平成に入ってから、別の名目で訪伯致しましたが、三回目の時当時のサルネイ大統領の謁見を賜るという栄（慶事）に浴しましたことは、今も深く心に刻まれております。これらの件は今回省略させていただきます。

扨て、本題に入りますが、いよいよ大歓迎のもと待望の「教授職養成講習会」が開催されました。多くの人の中から一次二次と面接等を経て選出された人材が 47 名おられました。

この 47 名は二班に分けられ、現地にいる日本人と日本語の通じる日系二世合わせて 28 名と日本語の全く通じないブラジル人 19 名に組み分けられました。

私は通訳付きでブラジル人のみの教室担当で実技指導をする事になりました。

「ボンジア」「オブリガード」「ボナタルデ」「ボアノイチ」くらいしか言葉の分からない中で教室が始まりました。皆様兎に角熱心で熱心で、朝十時から夕方六時迄朝昼夕と講義、実技を繰り返す乍ら規定のカリキュラムを消化して行く訳ですが、夕刻六時過ぎて、私の

方から「今日はこれで終了です」と声を掛けるまで誰も手を止めません。更には夕食を済ませた後も教室に来て、その日の復習をするという熱の入れようでした。

受講生の殆どは職業を持っておられ、多彩な顔ぶれでした。学校の教師、医師、公務員、銀行員、会計士、設計士、会社員等々、皆様社会的立場のある方で、年次休暇を取るなどしての参加でしたので、それは必死そのもの、真剣そのものでした。意欲と情熱で一人一人目が輝いておりました。

これは第二回目の参加者の講習会でのエピソードですが、「参加者の黒一点、マリアノ・ピニエイロ・マッシャーダさんという方ですが、彼は精神科の医師で、大学教授も兼ねておられ、ブラジルの首都ブラジリア（サンパウロから飛行機で二時間）から来られ、同じ病院に勤務する女医のマリーナさんと一緒に参加でしたが、病院側としても何日もの間、二人が抜けると大変困るといので許可がなかなか出なかったそうです。そこで二人は毎日のように病院長の部屋や院内に花を飾り、花を通して自分達の心をわかってもらおうと姿勢を正し、山月の花の意義をお伝えしたところ、その真心が認められ参加出来た、という事でした。

私はこの経緯を伺い、美しい行動力、実行力に、この様な人達が将来ブラジルの山月光輪花を担って立てば微動だもしない、立派な礎が出来ると確信を得ました。

話は教室での状況に戻りますが、教室での実技指導は厳しい一方、大変明るく陽気な場面も多々ございました。皆さんは花材に対して大変思い入れを持ち花材を丁寧に扱い、一花一葉じっくりと眺め対話しているかの如くに見受けられました。

私は皆さんの生けられた花を順番に一人一人拝見させていただき乍ら講評し、手直しして行く訳ですが、私の発する言葉、一言一句を聞き漏らすまいとメモを取り、又思いがけない質問が飛び出し、私はいつも汗びっしょりでした。この様な熱意に圧倒されながら、受講生の持つエネルギーに私自身の持てる力が引き出され、思いもよらない言葉が不思議に次ぎ次ぎと口から出て参りましたので、皆さんの納得のいく講評、手直しが出来たように思います。これは自分の力量以上のもので、当然通訳の方の貢献度百パーセントのおかげであり、ユーモアも交え大いに助けていただきました。

その中の一人、ロミウダさん（35 才）という女性、作品の講評に際し、彼女は、「私に限って、いいですね、なんて褒めないで下さい。悪いところは徹底的に悪いと言って下さい」と、はっきりピシィと申されました。又、別な人からは「良く入っていますね。」と申しましたところ、「何処がどういいんですか。私はそうは思いませんが・・・」と反問されました。漠然とした褒め言葉は通じない事、的確な講評でなければ納得しない事を教えら

れました。

こうした受講生の真剣な取り組みに強い責任を感じ、祈りつつ一期一会の心持ちで作品に接しさせていただきました。と同時に真面目で素直な受講生に対して形に捉われて固定化しないようお一人お一人に対し開祖の心、「創造性や個性を伸ばす事」、「自然を尊重する事」という点に心がけさせて頂きました。

日を重ねる毎に心技両様、長足の進歩の跡が見られ、和やかな空気が流れました。私の下手なゼスチャーも段々板について来て、伝わるようになり、上手だとお世辞を言ってくれる人もあらわれました。言葉は直接通じなくても「以心伝心」という事から、お花という共通の媒体を通し、「もの言わぬ花がものを言う」、「真心一杯に接して行けば必ず花が伝えてくれる」という尊い体験を何度もしました。

講習会の最後に教授三名全員で実技審査を行う訳ですが、審査の結果、優秀な成績で全員助教授の資格が付与されました。日本の生徒と遜色のない成績に大変驚きました。三週間というハードなスケジュールの中、休む人もなく、一人の落伍者もなく本当に素晴らしい講習会だったと思います。

資格を拝受された皆さんは感激し、互いに抱き合い、報われた喜びで涙を流しておりました。この歓喜の渦の中で、私達も言葉に表せない感動をいただきました。今もその時の光景を思い出しますと冥利に尽き、胸が熱くなります。

講習会を通して更に感じました事は

- ①どんな事も、新しいことでも、理屈に合えば守り抜くという事
 - ②礼儀正しく、教えを受ける事に対して感謝の念が強い事
 - ③教室がいつもきれいに整理整頓されて、ゴミはすぐに片付けられ、黒板も常に気分良く使用出来た事
 - ④どんな花材にも出会いを大切にし、不平を言う人はなかった事
 - ⑤みんな前向きで明るかった事
- 等々でございます。

ブラジルの文化にないこの華の道に対して真摯に、健気に受け止め吸収する受講生の意欲の姿に心から敬意を覚えました。

私自身も改めて日本文化の一端である華道に携わらせて頂ける感謝と誇り、生命ある花を更に「生かす」という喜び、「美しいものをより美しくする」という尊さ等、噛み締めました。

ある時、幾人かの受講生から、私が講評し手直した作品が「まぶしい」と目をこすり乍ら驚きの声を上げた事がございましたが、「花は生きている」・「花は生命体である」と畏敬の念を抱きました。

本当に私は受講生から多くの事を学ばせていただきました。

「教える」という事は「教えられる」「育てられる」と強く思いました。そしてそこから新しい力が湧いて来るということを思い知らされました。

「花の持つ力の素晴らしさ」「自然の力の偉大さ」を実感し、今後益々開祖の心である「花による天国化運動」を身を以って推進し、「社会の美化」「人心の向上」につとめ社会に役立つ人間に成長させていただきたいと切に思っております。

このように花と人との係り合いの中で、自己を練磨する事の大切さを再認識し、お花を通し今後更に人生修業の道を歩みたいと願った次第でございます。

昼夜兼行のスケジュールの三週間でしたが、少しも疲れる事なく、時差も乗り越え、逆に受講生の皆さんからエネルギーをいただき、瞬く間に講習会を終える事が出来ました。

これ一重に受講生の熱烈な学びの姿勢と主催者側の暖かいご配慮のおかげと存じました。そして元気をもって次の国アルゼンチンへと伺いました。(2017・1・9)